

嘘つきだらけの誘惑トリガー

目次

嘘つきだらけの誘惑トリガー

5

嘘の終わりは君への誓い

269

嘘つきだらけの誘惑トリガー

「街で見知らぬイケメンと知り合って、その場のノリでベッドインできる？ もしくは恋人でもない同僚や知人となんとなくそういう雰囲気になって、ホテルに行くってアリ？」

「とんでもない質問をしてきたのは、私、柚木仁菜の学生時代からの友人である、峰まゆりだ。」

ときは金曜の夜、仕事帰りに女ふたりで居酒屋で食べて飲んだ後のことである。

飲み足りなかった私たちは、目についたバーに入ることにした。駅から徒歩三分のその店は、金曜日になるとジャズバーになるらしい。生演奏を聞きながらおいしいお酒が飲めるとは、素敵じゃないか。

——なんて思っていたのだが、考えがamacかった。カウンターに座り、出てきたマティーニに口をつけた途端の質問がこれだ。明け透けに話し合える長年の友人は、黙っていれば和風美女なのだが、口を開くと残念である。

「いや、無理でしょ。行きずりの人もあり得ないけど、恋愛対象として見ていない知人とも、無理。たとえアルコールが入っていたとしても、その場のノリでホテルに行くことだって断固拒否っていうか、そんな準備が万端な女に見える？ 私」

「だよ。ドラマや小説でよくある、ムードに流されちゃってシャワーも浴びずにそのまま……って、リアルじゃあり得ないわ」

フィクションは、私にとってはファンタジーだ。ドラマの世界はドラマの中だけのお話で、現実である私の身には起こり得ない。

女も三十間近になれば、いろいろと身体に変化が出てくる。「お肌の曲がり角は二十五歳」という子供の頃に聞いた言葉が、最近頻繁に脳裏をよぎる。

「若い頃のように化粧を落とさずに寝ちゃうのも、この歳になると恐ろしくてできない」

現実感溢れるセリフが口から出た。

「若さって無防備だよ。まあ、うちらには予定外のアバンチュールなんて起こらないから、ある意味安心かな」

まゆりの言葉に頷き、ふたり同時にお酒を呷る。

柚木仁菜、二十九歳と数か月。

もう二十代最後の十二月だ。クリスマスが近づくにつれ、カップルがやたら視界に入ってくるけど、数年前と違いなんの苛立ちも感じなくなっている。もうそんな時期か、としか思わなくなった。私に最後に彼氏らしき人物がいたのって、何年前だ？ 相手の顔も覚えてもない。

「そんな望まないアバンチュールより、旅行行きたい、海外旅行。エステとかネイルとか、そういう細々とした女子力アップじゃなくって」

「わかる。現実逃避で海見ながらぼーっとしたいわ。南の島でヴァカンスとか」

私はひとりで海外に行くことに、なんの抵抗もないタイプだ。まゆりも私と同じ感覚をしている。美容にかけるお金があるなら、それを旅行の費用にあてたいというのがふたりの共通見解だ。近場の温泉でプチ旅行、もしくは頑張って貯金して、年に一度は海外へ、とか。自分への贅沢ぜいたくなご褒美ほうびといえる。

身軽に自由に動きたい派である私たちは、お互い旅行好きであっても、一緒に行くことはあまりない。お互いの好きな場所も違うから、基本ひとり旅だ。誰かと行く旅行もそれなりに楽しいが、ひとり旅はすべて自分の好きにプランを組めるため、贅沢ぜいたくな時間を過ごせる。そんな自由な旅行なんて、彼氏や家庭ができたらなかなか味わえないだろう。

お店の隅っこでひそひそと話す内容は、三十路みそじ直前の身に北風のごとく刺さる。でも、気を張らなくていい友人との会話だから、よしとしよう。

すぐ近くにほかの客はいない。ジャズの生演奏もろくに聞かずに話し込んでしまつて、ちょっと申し訳ないとも思うけれど、その演奏のおかげでほかの客の邪魔にならずに、ある意味安心してこんな話題に花を咲かせられるのだ。

「なんとなく最近、女性ホルモンが低下してる気がする。お肌の潤うるおいが足りてないというか」

「保湿に気を配つても、どこか乾かわいている気がするんだよね」

さすが親友。わかっている。

「だからといって、恋愛をすれば潤うるおうとも思えないんだけど」

「ないね」

バツサリと切つたまゆりと、ため息をつく。

大好きな人のためにオシヤレを頑張る時期はとくに過ぎた。今は恋愛について考えても、疲れしか感じない。

——ダメだ。やはり私たちには、一夜の過あやまちなんて起こり得ない。絶対に理性が勝つから、ブレーキがかかつてしまう。

ああ、まったくふたり揃つて残念すぎる。

ふと、先日職場の後輩が言っていたことを思い出した。

「この間さ、彼氏と同棲中の後輩と、実家暮らしの子と話してて、彼女らにひとり暮らしって寂しくないんですか？ って訊かれたんだよ。私には無理です、って。思わず真顔で、なんで？ めっちゃ自由だよ？」と答えちゃった」

「趣味に走れるし時間も自由に使えるし、正直ちか楽らくよね。家事は全部しないといけないけど。私の場合、いきなり男がきたら部屋がヤバイ」

「同じく。私も無理だ」

歳を重ねるにつれ、見られちゃいけないものだけは増えていく。趣味の漫画や乙女系エロ小説なんて、恋人のいないひとり暮らしの今だから、保管場所に困らないのだ。彼氏ができたらどこに隠せばいいの。

同棲なんてもつと無理。プライバシーがなくなる。

こんなじゃ結婚なんてできないのではと思われそうだが、そんなの、自分が一番わかっている。

というかもう、私は一生おひとり様で構わない。おいしいお酒を飲みつつ、好きなものに囲まれて日々を楽しく過ごせれば、文句なんてないのだ。

「正直、寂しさなんてここ数年感じてないんだけど。これもヤバいの？」

「仁菜もか。どうだろうね、世間的にはダメかも。でも私も、強がりとかじゃなくて、まったく寂しくないんだよね。むしろ今の生活が快適すぎて、崩せない」

「いづれ寂しいって感じるのかなあ。人と暮らせる気がしないから、そのときはベットでも飼えばいいよね」

「私、老後はスイスに住もうかと思ってる。なにかのランキングで、スイスが一番老後生活を送りやすいってあってさ」

「スイスってチーズ料理しか思い浮かばないなあ。確か公用語が四つくらいなかったっけ？」

「英語は問題ないし、フランス語も多少話せるからいいける」

見た目が純日本人のまゆりは、語学が得意だ。仕事は大企業の秘書。ちなみに私は、親戚の弁護士事務所で法律事務員として働いている。弁護士ではなく、いわゆる弁護士のアシスタントだ。最近ではパラリーガルと言われることも多い。

「老後か……。どうしよう、私も将来を見据えたビジョンを持たないとまずいね。三十代半ばになつたらマンションでも買おうかと思ってたけど、そろそろ現実的に考えるべきなのかも」

「仁菜のご両親は見合いしろとか言わないの？ あんたちゃんと頑張ればそれなりにモテるのに。」

私はもう諦められてるけど」

「やだよ、頑張りがたくない。モテるって言ったって、一部のマニアにだからね。背が低くて胸があるだけで寄ってくる男なんか、いらないわ。それに、見合いなんて嫌。うちは兄貴が結婚してて、もう孫もいるから、両親はうるさく言わないよ。そのうち地方にでも引っ越して、スローライフを送るのもいいな。ほら、ネットさえ繋がれば、できる仕事はいくらでもあるし」

「転職か……。悩みは尽きないなあ」

師走だからだろうか。カップルを見てもなんとも思わないというのに、人生については妙な焦燥感に駆られる。感傷的な気持ちにもなるし、「今年一年早かった」なんて、去年と同じセリフを呟いてみたりもしてしまう。

進歩ないな……。そもそも私は成長どころか退化しているんじゃないだろうか。

目尻の皺はまだ目立たないけれど、ほうれい線は気になってきた。笑うと、リキッドファンデを塗ったところにほうれい線が浮かぶのだ。目の下の色素沈着も気になる。

なんだかな〜もう……。と思うことが多すぎる。一日が三十時間にならないかな〜とか、そろそろこちらへんで体内時計が止まってくれないかなあなど、支離滅裂でとりとめもないことを考えてしまふ。

「二十代最後の熱い思い出を作る気力すら起きないんだけど」

「私は毎日おいしいお酒が飲めればいいわ。たまにこうやって仁菜と愚痴ったりして」

「私も、まゆりとこうしてお酒飲んでお喋りできれば毎日楽しいよ」

私が望むのはきつと、平凡な日常なのだ。

感情が乱されるような変化はいらない。だって疲れるじゃない。

二杯目のお酒をバーテンダーに頼んで、それを飲んだら帰るかど話していたときだった。入り口の扉が開く小さな音を、何故か耳が拾う。

何気なく顔を向ければ、ふたり組の男性が入ってくるころだった。見るからに人目を惹く容姿の、欧米人と思われる外見。ふたりとも、モデルか外国人タレントかもしれない。

周りの視線をあびすぎてまともに街を歩けなさそう、なんて感想を抱いていたら、ふたりのうちのひとりが、チラリと私たちへ視線を向けた。

正面から見ても、美形は美形だった。

しかし私たちは、整った容姿の男に興味はない。

「顔のいい男は観賞用で十分だわ」

視線をカウンターのグラスに戻し、ぼそりと呟いたまゆりに同意する。

目の保養にはいいが、お近づきにはなりたくない。だって面倒くさそうだから。

彼らに興味を失せ、再び会話の花を咲かせはじめた私たちは、近づいて来る足音に気づくのが一拍遅れた。

「ここ、いいですか？」

背後から声をかけられて、振り返る。先ほど入り口にいた美形ふたりが、いつの間にやら私たちの隣の席を指差して、たずねていた。

「どうぞ」

まゆりが答える。彼女に微笑んだのは、金髪に碧眼の、見るからに王子様な男性だ。年齢不詳で、若いのか年上なのか、白人の実年齢は外見からじゃわからない。

「ありがとう」と彼の連れの、黒髪の男性がお礼を告げた。

別にお礼を言われても私たちがキープしている席じゃないし、なんて思いつつも曖昧に笑って流すつもりでいたのに――ガタンと椅子が引かれたのは、両隣の席。

ん？ と思ったときには、何故か私たちは、美形ふたり組に挟まれていた。

「(え、ちょっと待って。なんで私たち、囲まれているの?)」

「知らないわよ。まゆりの隣が二席空いてるんだからそっちに座ればいいのに、私の横にまでくる意味がわからない」

見事なまでのアイコンタクトで会話をした私たちは、瞬時にバーテンダーを探した。頼んだお酒をさっさと飲んで、微妙な空間になったここから抜け出そう。

しかし忙しいのか、カクテルが届くまでは時間がかかりそうだ。妙なプレッシャーを感じて、落ち着かない気分になる。

カウンターのの上に置いていた手帳を、バッグの中へしまった。

「金曜日レディふたりでジャズバーなんて、オシャレですね」

金髪碧眼の美形が、爽やかな笑顔で言う。人好きする笑みに癒やされる女性が多いだろう。

「本当にふたりだけなのか？ 恋人と待ち合わせしている可能性もあるだろう」

私の隣に座る黒髪の男が、質問してきた。よく見るとこの人は、どことなくアジア人の血がま

じつていそうだ。

ふたりともイントネーションに多少の外国語訛りがあるけれど、かなり日本語が上手い。旅行者には見えないから、日本に住んでいるのかもしれない。

「ええ、ふたりだけです。でも今頼んでいるのを飲んだら帰るところですが」

完璧な外面笑顔で社交的に答えるまゆりは、役員秘書っぽい。言葉遣いも先ほどまでとは違って丁寧で、口調も落ち着いている。

まゆりの隣に座る王子が、「こんなに美しい人たちを放っておくなんて、信じられません」とお世辞を言った。

「でもそのおかげで、こうしてお知り合いになれたことに感謝します。私の名前はデイビッド、彼はジェイ。あなたたちのお名前を訊いてもよろしいですか？」

やたら丁寧で、キラキラした笑顔をふりまかれた。

薄暗い店内だからか余計に眩しくて目がつぶれそう……

美形は観賞用であって、近づきたくはない。だって顔のいい男の傍って、余計な気を遣うじゃないの。

私の理想は、変な気を遣わなくていい楽な男だ。

これだけ顔がよければ入れ食い状態だろうに、何故私たちに声をかけるのか。理解に苦しむ。名前をたずねられたまゆりは、にっこり微笑んだまま「A子です」と、堂々と偽名を名乗った。

「エイコさんですか。はじめまして。ではそちらのあなたは？」

え、私？

B子じゃ偽名だとバレルだろう。咄嗟に名前にも使えそうなアルファベットを思い浮かべて、口から出たのは「K子」だった。

「エイコとケイコか。ラストネームは？」

妙に尾軀骨に響く艶っぽい美声で、私の隣の黒髪が囁く。

バーカウンターの椅子はスツールで、隣との距離が近い。そこにさらに身をのりだしてくるのだから、パーソナルスペースに明らかに侵入されている。しかしぐつとこらえて、今度は私から名乗った。

「佐藤です」

「鈴木です」

日本人に多い苗字。もちろん、私たちの本名とはまったく違う。

誰だよ、佐藤K子さん。思いつきり偽名にしか聞こえない。

しかしながら、さして不審に思われることなく、彼らはそのまま私たちを「エイコ」に「ケイコ」と呼んだ。

ようやく待ちわびた飲み物が届いたタイミングで、彼らもお酒を頼む。バーボンは、私たちの目の前ですぐに作られた。バーテンダーさん、なんで彼らには対応早いのか。納得がいかない。

「カンパイ」

「か、乾杯……」

気づけば、グラスを合わせて初対面の外国人と飲み合っているこの状況に、激しく困惑する。親友とはいえば、金髪王子と親しげに談笑していた。順応力が高いまゆりの心配はしていないが、私はどうしたらいいのだろう。

居心地の悪さを感じながら、サンタリアをぐいっと飲む。フルーツの酸味がほどよくきいていて、おいしい。

さっさとグラスを空けて、ここから退散しよう。

この男たちとは深く関わってはいけないと、私の本能が訴えている。美形だからというだけじゃない。それ以上に隙のなさが怖いというか、とにかく落ち着かないのだ。

「ケイコはお酒に強いのか？」

「まあ、それなりに」

じっと見つめてくるから、こちらもまゆりを見習って外面笑顔を貼りつける。

少し癖のある濃い色の髪の毛。若干タレ目だが瞳の奥は鋭くて、凛々しい眉が男らしい。柔らかい印象が強いデイビッドより、このジェイという男のほうが圧倒的に精悍だ。同じくらい曲者の気配がするけれど。

「お酒で酔いつぶれたことはないわ」

「それはすごいな。ここで長く飲んでいるのか？」

「ここではこれが二杯目よ。その前にご飯を食べて、そこでビールを飲んできたけど」

バーボンのグラスを掴むジェイの手に、自然と視線が吸い寄せられた。骨ばった大きな手に、不

覚にも胸が甘くときめく。

男らしい手の甲の骨のラインに、節くれだった指。グラスを掴むその仕草は、理想的で涎ものだ。私がパーツフェチであることを、まゆりだけは知っている。私は手から手首にかけてのラインと、肘から肩にかけての筋肉が好きなのだ。

あまり理想のパーツを持っている男性っていないんだよね、なんて思いながら、私もワイングラスに入ったサンタリアを半分ほど飲み干した。

いくら手が理想的でも、お近づきになりたいとは思わないから、無難な話題で適当に会話を切り上げよう。

すると、デイビッドがまゆりと私に向かって言った。

「おふたりは、普段なにされてるんですか？」

「私もK子も会社員よ」

振り返った友人が私に目で同意を求めてきたので、とりあえず頷いておく。

「おふたりは仕事で日本に？」

「はい、そうです」

「一週間ほどで帰国するが」

と、最後に補足したのがジェイ。どうやら彼らは出張で日本にきているようだ。

仕事の詳しい話に興味もなければ、相手のことを深く知りたいとも思わない。同じ気持ちのまゆりと適当な相槌を打ち「大変ですな〜」と締めくくれば、何故か男どもの笑みが深まった気がした。

違和感に首をかしげるよりも早く、カウンターに置いていた手をジェイに握られてギョツとする。
「寂しがつてはくれないのか？」

「はい？」

ぎゅっと握られた手に力が込められ、口許が引きつる。彼は、そのまま私の手を顔に近づけた。
指先が、ジェイの唇に触れる。

「……っ！」

はつきりと聞こえたリップ音と、柔らかな感触に、頭が一瞬真っ白く染まる。

気のせいだろうか。じっと見つめてくる目が濡れている気がする。茶色の双眸に潜んでいる熱の正体に気づいてはまずいと、私の脳が危険信号を発信した。

「さあ、寂しがるもなにも、出会ってまだ数分だし。わからないわ」

「そうか。なら俺を思い出してくれるように、今のうちに君に刻めばいいんだな？」

どこの小説に出てくるヒーローよ！ と言いたくなるセリフを恥ずかし気もなく紡いだ男は、今度は私の手の甲にしつかりと唇を押し当てた。

僅かに濡れた生々しい感触に、肌が粟立ちそうになる。

……ヤバイ。どういふつもりなのかまったくわからないが、とにかくこれは、本気でさっさと逃げたほうがいい。

ちらりとまゆりを見れば、彼女は王子様を適当にあしらっているようだ。

ああ、もう。一体なんなのだ、今夜は。

妖げな熱のこもった眼差しに気づかないふりをして、空いている手でグイッとサンダリアを飲み干した。トン、とグラスを置いたのと、まゆりが身じろぎした気配を感じたのは同時だった。

ふたりして艶やかに、この見目麗しい男どもに微笑んでみせる。

「ごめんなさい、私たち、ハンサムな男性は恋愛対象にならないの。火遊びのつもりならほかの若くて可愛い女の子に声をかけてみては？ ふたりとも素敵な男性だから、簡単に手に入るわよ」

「俺が気に入ったのはケイコなんだが」

そんなセリフは聞かなかったことにし、スツールから立ち上がってバッグを手にする。

「今夜はあなたたちのおかげでおいしく飲めたわ。ありがとう」

まゆりがお礼を告げ、請求書を持って来たバーテンダーと会計をすませた。払うと言いだした男たちにきっぱりお断りをして、自分の分を支払う。

「せめて、連絡先を教えてくださいな」

精悍さに色気がまじった空気を纏うジェイが、腰に響く美声で懇願する。

その声だけでお腹いっぱい。いや、彼の色香にあてられて、この一晩で女性ホルモンが少し活性化された気がする。

ありがとう、でもこれ以上傍にいるのは危険を感じるから逃げよう。

「どこかで偶然もう一度会えたら、そのときは教えてあげてもいいわ」

なんとも上から目線な断り文句を口にして、ふたりで出口へと向かう。私たちはそのまま振り返ることなく、お店を後にした。

「いや、面白い夜だったねー」

「まゆりがいきなりA子なんて名乗るから、焦ったじゃないの。ずるい、自分だけ簡単な名前を見つけて」

「あんたもB子じゃおかしいからK子にしたんでしょ？ よく咄嗟とっさに思いついたわねー。でもKの前にIもあるから、アイコでもありだったけど」

「そうか、I子もありだったか。思いつかなかった。」

「昨今さっかんは物騒だから、そう簡単に個人情報なんて教えないわよね」

まゆりがさらっと言った。

やっぱり私たちは、その場の勢いで身体の関係を持つなんてあり得ないな。

終電間近の駅に到着し、一緒に電車に乗る。まゆりが降りる前に、少しだけジェイのパーツに惹かれたことを白状した。

「そういえば仁菜って、手フェチだったっけ。結構よかつたの？」

「正直いいパーツしてると思った。手首の骨とか腕時計のバランスとか、もろもろ。腕まくりしてほしくらい」

手を握られたときは、あまりにも理想的な手だったから目が釘づけになった。けれど、いくら好みでも、初対面の怪しい男の手をいきなり撫で回したいとは思わない。

「二次元だけかと思つてたら、三次元でああいう美形がいるんだね」

「外見があれで、声も手もかっこいいとか！ スペック高すぎて別次元だわ。まあ、暫くしばらくあの店の周辺に行くこともないだろうし、あのふたりに会うことはもうないね」

「そういえば仁菜、年末は忘年会とか入ってるんじゃないの？ 今度また空いてる日があったら教えて」

「わかった。まゆりのほうが忙しそうだから、そっちもまたスケジュール教えてね」

先に降りた彼女を見送り、私も数駅先で電車を降りた。

帰宅後シャワーを浴びてすっかり化粧水と保湿クリームを塗りたくつてから、私はぬくぬくとベッドの中に潜りこんだのだった。

Day 1 — Monday —

週明けの月曜日。

金曜日の非日常的な夜のことなどすっかり忘れ、仕事に没頭した後のことだ。勤め先の法律事務所を出た途端、ぐいっと誰かに腕を掴まれた。

「え？」

振り返ると、黒いコートを着込んだ男が立っている。先日の外国人、ジェイだった。

「見つけたぞ、ケイコ……いや、ニナ・ユノキ」

「……は、げえっ!？」

僅かに柳眉を寄せた美形は、「俺は禿げじゃない」と返す。

いや、そこはどうでもいい。あなたの毛髪事情に興味はない。

「なんで、ここに？　っていうか、名前も」

「ふたりして偽名を使うなんてやってくれるな？　おかげで探し出すのに少々手間取った」

「なにそれ、ストーカー？　怖いんですけどっ」

肘を掴まれたままジェイを見上げる。そういえば座った体勢でしか喋っていないかつたから、彼の身長がどのくらいあるのかわからなかった。

小柄な私が見上げる位置に顔がある。恐らく一九〇センチ近い。均整の取れた身体は鍛えられているようで、立っているだけで隙がない。

引きつり顔の私に、男が若干ムツとして訂正する。

「逆だ。俺たちは取り締まる側だ」

「え、それって……」

ダメだ仁菜、考えちゃいけない。知ってしまったら後戻りできない気がする。

冷や汗を流して硬直する私に、男は妖しく微笑んだ。道行く人たちに、ちらちら見られている。

だが、その緊迫感、スマホの着信音によって壊された。腕の自由を取り戻しスマホを確認すると、テンパったメールがまゆりから届いていた。

『この間の二次元生物が会社の前に!』

たったこれだけで、あちらでもなにが起こっているのかを察する。

「……デイビッドも彼女のところに?」

「デイビッド……ああ、そうだ」

微妙な間が気になった。訝しむ私の表情に気づいたのだろう。ジェイがニヤリと笑った。

「David, J'ay. 君たちのA、Kと同じく、俺たちの名前もアルファベットから取った仮の名前だ」

「なっ……」

DとJって!　じゃあ本名はなんなの!

咄嗟に口から出そうになったが、お口チャック。

いけない、これ以上踏み込むのは危険だ。私は彼に興味なんて持っていないのだから。

「なんで彼女の——まゆりのこともわかったの」

「そんなの俺たちには簡単なことだ」

「それって職権乱用じゃ……」

「さて、難しい日本語はわからん」

ご都合主義だな!

「君が俺に興味がないから、会いたくなった」

さらりと意味不明な問題発言をした彼は、その魅惑的な手でギョツと私の手首を握る。

逃がさないように、逃げられないように。

強固な檻をちらつかせ、本名不明の偽名男は、私に色気のままじた声で問いかけた。

「出張はちょうど一週間後、来週の月曜までだ。帰国が迫っているから好きなものを選んでいい。一、今すぐ既成事実を作るか、二、俺の国にきてじっくり口説かれるか、三、連絡先を教えて暫く遠距離恋愛を楽しむか」

「……はあ？」

思わず、ポカンと口を開けてしまう。しかしいつの間にかやら腰に手を回していた男は、さらに私の耳元で囁いた。

「俺としては一がオススメだが？ 君に損はさせない。たっぷり愛してやる」

「冗談……、っ!？」

選べと迫ったその口で、彼は答えを聞くよりも早く、私の唇を塞いだ。



子供の頃は、大人になれば当然のように恋人ができるものだと思っていた。

オシャレしてデートを楽しむ大人の女性たちが、キラキラと輝いて見えたのを覚えている。

けれど大人になるにつれて、理想は理想にすぎなくて、現実は容赦がないことを学んだ。

誰もが一度は夢見るシチュエーションなどこないまま、時間だけが無情に過ぎていく。

私は過去、彼氏ができて、両想いの期間は短かった。理想と現実とは噛み合わない。人生とはつくづくままならないものなのだ。

とはいえ、別に恋愛だけが人生の醍醐味ではない。

頑張つて働いて、おいしいものを食べて、趣味にお金を使って、ひとりで快適に過ごしていく。

両親が健康なうちに親孝行して、たまに家族旅行に連れて行けるだけの蓄えがあれば十分だろう。

そんな未来もそれはそれで楽しいはずだ。とづくに寂しいという感情をどこかに置き忘れてしまったなら、余裕で好きに生きていける。

でもお金は多ければ多いほどいいから、キャリアアップのための資格を取るか、いつそ転職でもしてしまおうか――

そんな人生プランをぼんやりと立てていたタイミングでの厄介そうな異性問題は、はつきり言うて迷惑でしかない。ぼつと出の美形に見初められるとか望んでいないから、速やかにお引き取り願いたい。

そもそも顔がいい男は恋愛対象外だつて告げたはずなのに。恋愛する気力も体力もない私に、この状況は到底楽しめるものではないのだ。

ここは和と仏のフュージョンのような創作料理の店。私は目の前に座る、不遜な笑顔で少しタレ目の、国籍不明、年齢不詳、おまけに名前は偽名の不審者を、じろりと見据える。

この男、人の唇を出会いがしらすに奪ったのだ。決して油断も隙も見せてはいけない。

「警戒心バリバリの猫のようだな」

低くて甘く、そしてからかいの滲んだ声で楽しそうに言う。スーツ姿の外国人男性――Jに連

れられ、私は現在彼と向かい合って食事をしている。職場の目の前で堂々と唇を奪うような男から逃れる術を思いつかず、渋々一緒に夕食を食べることになったのだが……。私の思考は、さつきから永遠ループだ。逃げる手段を考えついては、それは無理だと冷静な部分で判断する。もう、どうやって逃げればいいのか。

「バーで一度話ただけで職場と名前を調べて、同意もなくキスしてくるような男を警戒しない女は、ただのバカでしょ」

和牛のリゾットを口に運びながら言う。

赤ワインとも合うけど、これ日本酒でもいいけそう。

値段が書かれていないメニューの中から好きに食べて飲んで、お腹はそれなりに満たされてきている。

大人のフェロモンをまき散らす迷惑男は、苦笑気味にワイングラスを傾けた。

「そうだな。俺以外の男になら全力で抵抗しろ」

「なんで自分だけ例外なのよ。私にとつて一番の危険人物はあなたでしょう」

「確かに。しかし警戒してもっと意識してくれるなら、それもいい」

さらりと危険な発言を聞いた気がする。こいつの思考回路が少々怖い。

食後のデザートが運ばれてきて、コーヒートともに味わっていると、Jがジャケットの胸ポケットから手帳を取り出した。

「ユノキナ。六月三十日生まれ。家族構成は父、母、兄がひとりと、兄嫁に甥。祖父母はすでに

他界。有名私立大学の法学部を卒業後、母親の兄である伯父が経営する法律事務所勤務。現在恋人はなし。なにか間違いは？」

「……よく短時間でそこまで調べたわね、個人情報」

どんな情報網を使ったのやら。

一般人には入手困難な個人情報を短時間で調べるって、これは本格的に只者じゃない。

身元不明の怪しい男は信用できないと抗議したら、彼は欧州の警察関係者だと言った。現在は各国の警察が集まって開催されている、国際テロ組織のサイバー犯罪対策セミナーに参加しているだけだとか。

嘘か本当かはわからないけど……こんな手の込んだ嘘をつく意味はない気がする。

「警察庁の人間に聞けば証明してくれるぞ」

スマホを取り出した男を、慌てて制する。大事にされたら困るじゃない。

クリームブリュレを食べる手を止め、口に広がるほろ苦いカラメルとカスタードの甘さを中和させるように、熱々のブラックコーヒーを一口啜った。

ほぼ初対面の男に自分のことを知られているのは、ドン引くというか、慄いてしまう。犯罪者でもないのに警察関係者の調査対象になっているって、どんな状況よ。

この調子じゃ自宅のアパートまで知られているんだらうな……

年齢まで言わないのはせめてものフェミニズムだろうか。

じつとりした視線を隠すことなく目の前の美形に向ければ、見た目によらず甘党らしい男はチヨ

コレートケーキを食べる手を止めて、余裕の笑みを返した。

テーブルに置かれた黒い手帳にはなにが書かれているのやら。気になるけど、奴の職業上の秘密に触れる気はなかった。一度知ってしまったら、本当に逃げられないと私の本能が告げる。

そろそろ二十時近いし、今日はさっさと帰ろう。熱いお風呂に浸かって、冷えた身体とこの非日常的な空気を洗い流せばいい。

よし、と、思考を切り替えた直後のことだった。

「俺と結婚しよう、二ナ」

「……………は？」

今なんて言った？

「バカなの？」

「心外だな」

「出会って二度目、しかも一方的に素性を調べられているだけで、こっちは本名すら知らないっていうのに。そんな相手と結婚する気になんてなるわけないでしょう。文化の違いだかなんだかわからないけど、常識と価値観が合わない人とは交際になんて発展しないわよ。怪しすぎるっつーの」
もしくは結婚詐欺なんじゃない？

最近街でナンパされても、まずは宗教の勧誘か詐欺を疑ってしまう。

「なんだ、俺のことにまったく関心がないのかと思っていたら、気になっていたのか。名前は——」
「やめて、なにも言わないで。あなたの名前も年齢も素性も、興味も関心もないから。私に余計な

情報を与えて巻き込まないで」

聞いたら最後、後戻りできない事態なんて全力で回避だ。

クリームブリュレの最後の一口をスプーンですくって、コーヒーで流し込む。この場からさっさと去るつもりで、はつきり告げる。

「私は結婚なんてしたくないの。束縛されるのは嫌だし、好きに楽しく過ごしたいの。一体なにを思っただプロポーズなんてしたのかわからないけど、ほかをあたってちょうだい。まあ、あなたが帰国したら会わなくなるだろうけど」

「いや、会えるようにすればいいんだろう？ 年末のバケーションはいつからだ。国に招待しよう」

「お生憎様、既に予定が入っているわ。今年の冬休みはマチュピチュに行く予定だし」

毎年、あるいは二年に一度、私は海外旅行に行っている。それを楽しみに毎日仕事に励んでいると言っても過言ではない。

世界遺産を巡るひとり旅が、自分自身への贅沢な褒美だ。ひとり旅とはいえツアーに入って団体行動で動くから、そこまで危なくはない。治安が不安な国や地域には気をつけているし。

Jの眉が僅かにひそめられた。無表情の不機嫌顔で黙られると、途端に威圧感がすごくなるので居心地が悪い。微笑むと甘さのあるタレ目が印象的な色男なのに、なんだろうこの差は。やはり職業柄か。

「誰と行くんだ、その旅行は」

「ひとり旅ですがなにか」

「ダメだ、危険だ。今すぐキャンセルしろ」

あんたは私のお父さんか。

ちなみに家族は、年末の娘の旅行には慣れっこだ。旅先で購入したお土産を毎回楽しみにしている。行先が観光地だから、彼らもそこまで心配していないのだろう。

「ツアーに参加するんだから危険じゃないわよ。そりゃ自由行動くらいはあるけれど」

「君みたいな小さなレディがひとりで歩いていたら、すぐに襲われる。これだから日本人は平和ボケしていると言われるんだ」

「成人女性に向かって誰が小さなレディよ。失礼ね」

「小柄だと言っている。君くらい、男ひとりで簡単に攫えるぞ」

「攫われたことなんてないもの。危険な目にだって遭ったことないし、防犯ブザーも携帯しているわよ」

このとき、私は少々苛立っていた。だからこそ、多少の売り言葉に買い言葉となっていたことは認めよう。

だって人が折角楽しみにしている旅行をキャンセルしろって言われたら、そりゃ腹も立つ。あなた全然関係ないじゃない。私の身内でもあるまいし。

「なるほど。では物陰から突然襲いかかれても君は咄嗟に反撃できるほど、武道を嗜んでいるとでも？ 一瞬で気絶させられたらどうする。なにか起こってからじゃ遅いというのに、危機管理が

できていない」

「私を無理やり食事に誘って連れてきたあなたに言われたくないわね。どうせここに来た時点で、私の危機管理能力を疑っているんでしょう」

「正解だ。だが俺相手には警戒心を緩めていいと言ったはずだ」

「だからあなたが一番危険人物だって、私も言っただけだ？」

話が堂々巡りだ。苛立ちがおさまらない。

確かになにか起こってから後悔するのは遅いけれど、危ないかもしれないから外に出ないなんてナンセンスでしょ。

思えば、このときの私は意地になっていたんだと思う。ほぼ初対面の男に、年末の楽しみを否定されて。

「人目がある場所でそう簡単に人攫いには遭わないわよ」

「そうか。なら試してみるか」

「え？」

椅子から立ち上がった丁が私の腕をグイッと引っ張り上げた。急に立たされたせいで、立ちくらみしそうになった。直後、膝裏にさっと腕が通されて——気づけばあっという間に、横抱きに抱えあげられていた。

「わっ、ちよつと!?!」

「暴れたら落とすぞ」

「下ろして人攫さらいっ」

「なんだ、肩に担がれたほうがいいのか。食後だしそれはやめておいたんだが」

肩に担がれるとか冗談ではない。最悪なことにここは半個室になっている。

人の視線を遮さえぎる壁があり、先ほどまで視界の中にいたカップルはしばらく前に去ってしまった。少し歩けば広々としたフロアに出るけれど、この男は何故か入り口とは逆の方向に歩みを進める。

いつでも去れる準備を思っていたから、バッグを腕にかけていた。それが幸いなのか不幸なのか……

「待って、どこに行くの。それに支払いは」

「部屋につけてあるから問題ない」

「なにそれ、どういうこと」

手足をばたつかせて暴れる私を見て、ニヤリと笑った不埒ふちな男はあろうことか「あんまり暴れるとパンツ見えるぞ」と、デリカシーのない発言をかました。

「……ッッッ！」

「俺だつてまだ見ていないのにほかの男に見せるな」

「わけわかんないこと言わないでくれる？」

ああもう、下ろしてよ！

すれ違う店員は頭を下げて、「ありがとうございました」と言っている。何故誰もこの状況に慌てないの。バカップルのイチャイチャとでも思っているのだろうか。

裏口の通路を出ると、すぐにエレベーターが現れた。ずらりと並んだフロアボタンの三十階を押している。どうやらここはホテルの隣のビルで、ホテルのVIP滞在者向けの連絡通路があり、限られた人物だけにその通行許可が出るらしい。

そんな裏情報、このタイミングで知りたくなかった。

「ほんつきで殴るわよ」

「君に殴られたところで痛くも痒かゆくもない」

お腹の上に載せたバッグを手で押さえているので、殴るとしても片腕しか使えない。

それでも力の限り暴れる私を、Jはようやく下ろした。しかし、バッグをひょいっと奪っていく。

「あ、ちよつと……っ、っ、！」

抗議の声は、彼の唇に吸い込まれた。

一日で数年ぶりのキスを二回も体験するとか、厄日だ。

「ふ、あッ……んんっ」

身長差で、首が苦しい。しかも微妙に爪先が浮いている。首を振ろうとしても後頭部は反対の手で押さえられていて、されるがままで。

気づけば腰の手が移動して、お尻触られてるし！

許可なくレディの唇を奪うだけでは飽き足らず、お尻まで触るなんて！ コイツの出身地が紳士の国じゃないことだけは明らかだ。

チン、とエレベーターの到着音が響く。振動をほとんど感じさせない動きで止まったこの箱から

一歩出れば、足音を吸収するふかふかのカーペットに出迎えられた。

「やめ——っ」

「大人しくついてくるならやめてやる」

Jは唾液で濡れた私の唇を舐めて、チュッと再び吸いつくようなキスを降らせる。至近距離で強い眼差しに射貫かれて、私はじめて被食者の心境というものに陥った。

——あ、ヤバいこれ。

せめてもの抵抗をしようと、声を上げる。

「一〇番！ お巡りさん、こいつ人攫いです！」

「なんだ、呼んだか」

この犯罪者じみた男が犯罪者を取り締まる側なんて、世も末過ぎる！

爽やかなヒーローが現れることなく、私は奴の滞在先であろうホテルの一室に連れ込まれた。

口づけをされたまま部屋に運ばれて、気づけばソファに押し倒されていた。

「待った待った！」

なんとか、覆い被さってくる奴を押しつける。

ようやく見回すことができたそこは、ひとりで滞在するには贅沢な広さの高級感のある部屋だった。

一介の公務員が泊まれるとは思えない豪華さに、啞然とする。

「なにを？」

「ソファに人を押し倒しておいて、なにを？」じゃないわ！

首筋に顔を埋め、あまつさえ肌にあいついてくるこの男は、心底油断ならないケダモノだ。

絶賛襲われ中の私は、力いっぱい手足をバタつかせた。

「レイプ！ これレイプだから！ 自覚あるの!？」

「同意を得れば問題ないだろう」

「誰も同意してないしっ」

「俺ははじめに一がオススメだと言ったはずだが？ 同意していなかったのか？」

あのわけのわからない選択のことか。あんなのどれを選んでも行きつく先は同じじゃないの。私に逃げる権利がない。それにそもそも、返事をしていないはず。思わずため息をつく。

「冗談はその顔だけにしてよ。私言ったわよね？ 顔のいい男に興味がないって。それとも嫌よ嫌よも好きの内とか本気で思ってるの？」ただしいケメンに限る。っていうのは、二次元に限る。って言葉ともれなくセツトなのよ。三次元じゃ普通に犯罪だから」

あれか、女の子にモテすぎて振られた経験がないから、多少強引でも結局は私が折れると思ってるのか。

そんなの冗談ではない。

先日まゆりと話していた通り、私はこんなドキドキなハプニングとは無縁な生活を送ってきたし、当然今後も、予定外のお泊まりなんて断固拒否する。

許可なく強引にキスマークをつけた男を睨みつけて、「がつつきすぎる男ってカッコ悪い」と言つてやれば、多少こたえたのだろう。Jはムツと柳眉を寄せつつ、私の隣に腰をおろす。

「いきなりキスとかキスマークつけるとか、サイテー」

ボソリとどめを呟くと、さらにぼつが悪くなったらしく、男はソファに座つて服の乱れを整える私に一言、

「……悪かった」

と、案外素直に謝つた。

「謝つてすむなら警察はいらないんじゃない？」

じつとりと見上げると、彼が視線を逸らす。

警察関係者の不祥事はまずかるう。しかも外国からやつて来たとなればなおさらまずいはず。

しかし、早くも開き直つた彼は、小さく嘆息して私を見下ろした。

「確かに同意もなくキスしたことは謝ろう。すまなかつた。だが二ナも悪い。そもそも君がひとりで海外旅行に行くと言うから、こうやつて俺が試すことになつたんだ」

「はあ？ なによそれ。私が攫われたことなんてないって言つたから、実際に攫つてみたつて言うの？ ……ちよつと歯食いしばりなさいよ。一発殴らせろ」

はあ〜と拳を吹きかけて温めていると、「何故グーなんだ」とすかさず突つ込みが入つた。

「そんな非力な力じゃグーで殴つても手が痛いだけだろう。やめなさい、君の手が傷つく」

「殴られることをした自覚がないようね？ 別にいいわよ、なら、真つ赤な手形をほつぺたにつけ

てあげる。今日はまだ月曜日だし、明日も仕事でしょう。周りに笑われても自業自得よね」

「土日が休みというわけではないが……。とにかく、これでわかつただろう。君くらい簡単に攫えらる」と

今回は恋人のフリをして攫つたが、人目につかなければもつと大胆な方法で攫うこともできる。

それこそ薬を嗅がされたら抵抗なんてできないだろう。

そんなことを話した彼に、気づけば説教されていた。

なにそれ、なんで私がそんなこと言われなきゃいけないのだ。

実際簡単だつただろうと言われれば、確かに否定できない。隙について担ぎ上げられたら、拉致なんてあつという間だそうだ。

悪意のある人間がない世界なんてない。どこで危険な事件に巻き込まれるかわからないから、せめて誰か同行者を連れて行けとJはのたまつた。

「同行者なんて、急には無理だし。それにもう行くのは数週間後だよ？ 今からキャンセルするにしたつて、キャンセル料も発生するし嫌」

「それは俺が払う。やめると言つてるのは俺なんだから、それが筋だろう」

「やめてよ、そんな筋合いはないわよ。そもそも、借りを作りたいくない」

「そんなことで借りだなんて思わなくていい。忘れたのか。俺は君にプロポーズをしたんだが」

「え……」

あれつて本気だつたの？

すっかり忘れていた話題を持ち出され、私の思考と身体がフリーズした。真剣な眼差しで見つめてくる男が足元に跪き、断りもなく私の手を持ち上げる。

「この前も思ったが、小さい手だな。白くて滑らかで、可愛い手だ」

褒めているのかまいちわからないセリフをはいて、キュッと握りしめる。その手は、困ったこととやっぱり私好みで、不覚にもドクンと心臓が鳴った。

男の人の、骨ばった大きな手。手の甲に浮かんだ骨に筋。ごつごつした指も少し硬めの皮膚も、なにもかもがバランスのいい理想的な手だ。

そこから伸びる手首と腕のラインも、きつと涎が出るほど好物だろう。

自分とは正反対のものに憧れるのかわからないが、昔から男性の手が好きだった。手の甲から手首の骨にかけてのライン、腕時計をつけている手首、そして上腕二頭筋までの筋肉と筋。男性に魅力を感じるポイント是人それぞれだと思うけど、私は断トツで手なのだ。

彼の、服の下に隠れたものを想像して小さく唾を呑む。ざわざわと胸の奥が落ち着かない。

私が密かなトキメキを感じていることに、彼は気づいていないだろう。

握りしめた私の手の甲をそっと親指でなでてから、Jは指先に唇を落とした。

……チュツ。

リップ音と柔らかな皮膚の感触に、肌が粟立つ。

見た目だけは極上の男が跪いて私の指にキスをするとか、まるで現実味がない。

映画のワンシーンのようで、眩暈を感じた。

「二ナ、結婚を前提に俺と付き合ってほしい」

見つめる眼差しが熱い。手からじんわりとJの体温がうつり、私の身体が落ち着かなくなる。

ダメだ、このままじゃいけない。おかしな雰囲気酔ってしまふ。

きつとここが、非日常的なホテルの一室というのかもしれない理由のひとつなのだろう。目の前の

美形が日本語を流暢に操っていることも、よく考えれば違和感ありまくりだ。

実は闇の組織の一員で、私をなにかの事件に巻き込むために詐欺を仕掛けていると考えると納得がいく。私の利用価値はさっぱりわからんが。

——とりあえず逃げよう。

これ以上真面目に考えてはダメだ。

握られていた手を取り戻して、すつくと立ち上がる。バーカウンターの上に置かれていたシヨルダーバッグを掴み、ダッシュでドアまで走ったのだが……。コンパスの長さが違うため、あつさり奴に腕を掴まれた。

「どこに行くんだ？」

尾骶骨に響くバリトンを聞いて、全身の産毛が総毛立った。過激なフェロモンを吸い込んでしまったような錯覚を感じ、片手で鼻を押さえる。

恋とか愛とか、そんなものと長らく距離を置いていた私には、彼の色香に耐えるだけの免疫がない。ぞわぞわしたなにかが足元から這い上がる前に、反射的にバッグをJめがけて叩きつけた。

「美形ならなにしても許されるわけじゃないんだから！」

彼に大したダメージはないようだが、すこし手が緩んだ。その隙に、扉を開ける。背後でなにか聞こえた気もするが、そんなのにかまっていられない。

ホテルを飛び出し電車に乗ったところで、私はようやく安堵のため息をついた。ああ、なんとという厄日……。外国人の美形怖い、恐ろしい。

文化の違いなのかなんなのか。出会ってすぐにプロポーズなんてあり得ないだろう。

押し倒された瞬間、貞操の心配よりも、まったく準備していなかった下着を心配したのも女子的におかしい気がするが――

しかし悔しいけれど、奴に言われた通り、危機感というものが薄れていたのかもしれない。

誰も私なんか女としての魅力を感じないし、危険な目に遭うのは溢れんばかりの女子力オーラがある子だけ、という油断があったのは事実だ。

蓼食う虫も好き好き、という言葉も世の中にはあることを思い出した。

もやもやした思いを抱えたまま電車に揺られて、自宅のアパートに帰宅する。が、ここに来てトラブル発生。

「……ない。鍵がないっ!」

ちよつと待って。嘘でしょう?

玄関扉の前で靴をひっくり返す勢いで探してみたが、いくら漁っても鍵だけが見当たらない。途方に暮れたまま、数駅離れた親友のまゆりのアパートへ向かうことにした。

一晩泊めてもらい、翌朝大家さんへ連絡しよう。どこで落としたのかはなんとなくわかっている。

十中八九、さつきJに靴をぶつけたときだろう。

「あの男……、一体私になんの恨みがあるの。とことん問題ばかり増やしてくれて……!」

明日出勤するのも気が重い。職場の誰かに今日のキスシーンを見られていたら最悪だ。なにせあそこは、親戚が経営する法律事務所なのだ。家族に知れ渡るのも時間の問題……

ぶるりと身体に悪寒が走る。思わずコートの前襟に首を埋めて、コンビニに駆け込んだ。

ビールを数缶買って、まゆりのアパートに奇襲をかける。メールしても返信はなかったけど、それは結構いつものことだったりする。家にいるときは、そんなに携帯チェックをしないのは私もまゆりも同じだ。

頻繁にきているため、ためらいなく呼び鈴を鳴らしたのだが……ドアを開けて現れたのは、まさかの金髪碧眼の王子様だった。コンビニで買ったビールが、袋の中で鈍い音を立てる。

「あれ、君はケイコ……じゃなかった、二ナ?」

「なんであなたにまで本名バレてるんですか」

「シャツとストラックス姿の彼が、何故まゆりの部屋にいる――
額にじんわりと汗が浮かんだ。

「遠慮します。はい、ビール!」

袋をそのまま彼に押しつけて、ダッシュで駅に逆戻りした。彼がなにか言おうとしたことも、お礼をかううじて聞けたこともどうでもよくて。全身の悪寒と汗が止まらない。

まゆりー！ もう食べられちゃったのか……！

親友が王子様の餌食になってしまった。心の中で合掌する。

「ご愁傷さま、という言葉しか思い浮かばなかった私は、しかし駅に着いてから途方に暮れた。

「どうするよこれから……」

ダメ元で大家さんに電話をしようとしたが、そういえば先週末に連絡があったのを思い出した。

一週間ほど不在にするから、その間になにかあったら息子さんに連絡するようにと言われていたのだ。

人がいい大家さんは、七十歳を過ぎた老夫婦で、五階建てのこの单身者向けのアパートを管理している。

今の時刻は夜の十時半。鞆を漁ってみるが、案の定その息子さんの連絡先が書いてあった紙は、部屋の中だ。確か、冷蔵庫にマグネットで貼ったはず。

「どうしよう。鍵屋を呼ぶにしても、旅行前だから無駄な出費は痛い」

それに今すぐきてくれるとは限らない。もう夜も遅いのに、業者を外で待っていないければいけないなんて、考えるだけでげんなりした。

仕方がない——鍵を取り戻そう。

私は啖咄を切った相手のいるホテルに戻り、連れ込まれたときと同じくVIP用のエレベーターに乗り込んで、三十階を押す。無駄に記憶力がいいのを嘆けばいいのか感謝すればいいのか。Jが滞在している部屋の前まできて、私は嫌々ノックした。

ガチャリと開いた扉の向こうにいるJの右手には、私の鍵。

目の高さまで持ち上げたそれを見せつけるようにチャリチャリンと音を鳴らし、彼が一言放った。

「お帰り、ニナ」

ニヤリと勝利を確信した美形は、殴りたいほど憎らしかった。

気力も体力も限界の私は、もはや渋面を隠す気もない。

「……鍵、返せバカ野郎」

「勝手に落としたくせに、返せ？ 俺が盗んだみたいない言い方だな」

「……………返してください、お願いします」

すべての元凶は自分のくせに！

そう思いつつも、頭を下げるこの屈辱。どこかで晴らさねば気がすまない。

Jは、扉の前に突っ立っていた私の腕を引っ張り、再び部屋に連れ込んだ。そして無抵抗の私をあっさり抱きかかえて、悪魔の微笑を浮かべる。

「落とし物の拾い主は、一定の謝礼を要求する権利があるんだっただよな？」

「……………ッ！」

つくづく今日は厄日だと思わずにはいらなかった。



大人になると恋をしにくくなるのは何故だろう？

単純に出会いだけの問題じゃなくて、精神的な面でもどこかにブレーキがかかってしまう。

一度異性がない生活に慣れてしまうと、とても楽だった。自分が好きなものを、好きなように選んで決めて。結果私のファッションもヘアメイクも、基本は機能性重視に落ち着いた。

いまさら自分を偽ってまで近づきたい人なんていないし、そんな気力がこの先わいてくるとも思えない。

オフの期間が長すぎたら、そう簡単にスイッチはオンには切り替わらない。

乙女センサーも恋愛スイッチも、恐らくさびついて使いものにならないっていうのに……

まるでマフィアに目をつけられた気分で、私は再び敵の根城に居座っていた。

「飲み物はなにがいい？」

「いらぬから鍵返してくれる？」

「断る。なんでもいいなら適当に出すぞ」

「……じゃあビール」

ホテルに備えつけの冷蔵庫からビールを出して、Jは私に手渡した。それを見て、さつきまゆりと飲もうと思って買ったことを思い出し、顔をしかめる。

ちよつと奮発していいビール買ったのに、もつたいない。

いや、ビールなんかより親友のほうが重要だが。

心の中でまゆりの無事を祈ってから、頭を切り替えて自分の問題に集中する。

ビールをぐびつと飲んで、目の前のソファに座る男を見つめた。

時刻はもう二十三時を過ぎている。そろそろ寝ないと、明日起きられない。

だけど鍵は返してもらってない。となれば、私は帰ることができないわけ……

「いつ返してくれるつもりなの」

「俺が帰国する日の朝だな」

「一週間後だっけ？」

「ああ、次の月曜の予定だ」

「それまで私にどうしろと？」

「君もここに滞在すればいい」

正気か。こんなところで、見知らぬ男と一緒に住めと？

今までの彼の言動から、この提案が冗談でないことはわかる。だからこそ、領けない。本気で彼に捕まってしまったら、今まで築き上げてきた平穏な暮らしとおさらばしなくてはならないじゃないか。

嫌だそんなの。いきなり面倒事を背負いたくない。それにいくら警察関係者だとしても、こんな胡散臭い男と一緒に住むとか、常識的にあり得ない。

「あのさ、無理でしょ。着替えもちゃんとしたメイク道具も、なにも持っていないんだけど。明日も仕事なのに、仕事用の服だつてないし。冷蔵庫の中だつて腐るし。どうしてくれるの」

呆れた眼差しで睨む。本当、観賞用ならピッタリだけど、三次元で顔のいい男はお断りだ。

服は重要だが、冷蔵庫事情は今適当に思いついた。実のところ、普段から腐らせているので、本当はあまり気にしていないのだけれど。

「仕事は九時から六時までだったか。明日の朝七時に受付に頼んで服を持ってきてもらうことになつているから、とりあえず明日の分は問題ない。残りは俺が揃えよう」

「ちよつと、まさか買うつもり？ 私をここに泊まらせるためだけに、服も化粧品も全部買うっていつの？ 無駄遣い過ぎる！」

なんとなく、見た目からエリート臭は漂っていたけれど。こいつ、エリートなだけじゃなくてセレブだったのか。余計関わりたくない。

ここで彼の申し出を受けて、全部受け取ってしまったら絶対に終わりだ。私の意志に関係なく、外堀を埋められてしまう。

Jが手の中で弄んでいる鍵を見て、たまらず呻いた。

「つていうか、おかしいよね。謝礼としてこの部屋に滞在しろつて、どういうことよ。元はと言えばあなたが勝手に私を連れ込んだのが原因じゃない。困った手を助けるフリして、困らせてるのは自分だつて自覚あるの？」

「俺は利用できるものはすべて利用する性質なんだ。諦めろ」

「はあ？ いいから鍵、返してよ」

「嫌だ。今返したらニナはもう二度と会ってくれなくなるだろう？」

「そんなの当たり前じゃない。なに言ってるの」

「それなら余計にこれは返せない」

Jがズボンのポケットに鍵を押し込めたのを見て、「ああー」と思わず声をあげた。

怒りと苛立ちでわなわな震える私に、彼はとびつきり甘い美声を響かせる。

「君が今すぐ俺と婚約するなら、返してやつてもいいが？」

「……その微妙に上から視線がムカつくわ」

睨めば睨むほど、奴の笑みが深まった。うつとりと私を見つめる眼差しまで、甘さを帯びている。目尻を和らげると余計タレ目が艶っぽくなるから、やめてほしい。公害だ。

「私には、あなたが私をほしがる理由がわからない。信用できない相手と交際どころか婚約なんてあり得ないでしょう。それに一言も私が好きだなんて言っていないじゃない」

「好きだ、ニナ」

「……嘘くさ」

軽すぎる。そんな言葉に騙されてたら、ここまでこじれていない。

「嘘じゃないんだが。まあ、確かに今のはタイミングが悪かった。しかし君が好きなのは事実だ。あの夜俺はケイコに一目惚れした。じゃなかったらここまで強引な真似はしない」

強引だという自覚はあったのか。

だが私の胡乱な眼差しは変わらない。

「ただ惚れっぽいだけなんじゃないの？　っていうか、あの夜のどこに一目惚れされる要素があったのかわからない。今だってそう。こんな地味で可愛げのない女のどこがいいの。趣味悪いと思う」

彼の言葉をほいほい信じられるほど、私の頭はおめでたくない。

あと五歳若かったら、少しはときめいたかもしれないけれど、もう三十路間近だ。正体不明の美形外国人——しかも出張中——と簡単に恋に落ちるようなバカにはなれない。

若気の至りというやつは、言葉通り若いうちにしかできない過ちだ。今やったら、過ちだけじゃなくて大火傷を負うのは明らかだろう。しかもどう考えたって、女の私のほうが被害が甚大。

ごくごくビールを喉に流し込んでいたら、半分以上減った缶を取り上げられた。私の隣に腰を下ろし、Jは人のビールを奪ったままじっと私を見つめてくる。

「自分に自信がないなら教えてやる。君はとても面白い。目が離せないほど表情が豊かだ。気になつたきっかけは第一印象と外見だが、話せば話すほどほしくなった」

「……なんで」

「俺に興味がなかったから」

「自分に関心がない女の子なら誰でも好きになるの？」

「そんなわけないだろう。現に俺は君の友人ではなく、二ナを選んだ。言つただろう、一目惚れだったと」

「大したオシャレしてなかったけど」

あの日の服装を思い出して首をかしげたら、隙を突かれて、腕を引っ張られた。

そしてあつという間に背中が腕が回されて——気づけばソファの上で抱きしめられていた。

あれ、なにこの状況。

鼻腔をくすぐる彼の香りに先ほど二度もキスされた記憶が甦り、おさまっていた胸のざわめきが再び近づいてくる。

「小さくて、コロコロ表情が変わる二ナはとても可愛い。言葉に嘘が感じられない。大人しそうに見えるのにはつきり言うところも、一筋縄じゃいかないとこも、一緒にいて飽きないし楽しい。インスピレーションでこの子だと思った直感が正しかったことを、今日確信した。やっぱり二ナがいい。二ナがほしい」

「ちよ……、なにいきなり……っ」

意地悪な俺様だと思っていたのに、直球で口説かれ私の体温が上昇した。

やめてよ、外国産美形に褒められるとか、そんなドッキリいらさないから！

低く掠れた声で、甘いセリフをはかないでほしい。可愛いなんて言葉、異性に言われ慣れていない私には、この程度の言葉で限界だ。

「君と離れたくない。だから離れられないようにしたい。仕事で滞在している今しか口説けないから、帰国するまでに君の心を奪いたい」

「~~~~ッ！」

耳元で囁きながら、Jが耳たぶを優しく舐めた。
ぞわぞわっと震えが全身に走る。淫靡なりップ音を響かせて、彼の唇が首筋に移動する。ゆっく
り肌を味わわれ、暴かれる感覚。

ダメだ、流されそうになる。この官能的な空気に酔いしれて、久しぶりの快楽を期待しそうに
なってしまう。

そんなの冗談じゃない！ それなのに、Jの口説きは終わらない。

「すぐに本気になればと言っていない。だけど俺には時間がない。俺は君に決めたから、君も早く
俺に落ちればいい」

「早くって、落ちるつもりはないけど……！」

「俺も逃がすつもりがないから、こうやって全力で口説いている」

「ひゃっ！」

チュツ、と瞼の上にキスを落とされた。

額、頬、鼻の上と、次々にキスの嵐に襲われる。

肝心の唇を奪わないのは、先ほど私が怒ったことを覚えているのだろう。だがそれも時間の問題
のような気がしてならない。

「身体から籠絡してしまおうと思ったのに、君はなかなか強情だ」

ぽそりと呟かれた言葉に、ぞっとする。籠絡なんて難しい日本語をなんで知ってるんだとか、そ
んな突っ込みはどうでもいい。この調子で攻められ続けたら、大した経験がない私は、いつしか首

を縦に振ってしまいそうだ。

なにか、なにか対策を打たねば——！

「コ、コンビニに行きたい！」

「コンビニ？」

「そう、ほら、ここに泊まるなら必要なものもあるし。化粧水とかお泊まりセットとかいろいろ」

「なるほど、ようやく諦めてここにいる気になったのか。それなら俺が買ってこよう。夜遅くに君
を出歩かせたくない」

「え……いや、それも悪いし」

咄嗟に断ったものの、よく考えれば悪くない提案かも。元凶はJなんだから、奴に行ってもらっ
てもいい気がする。

鞆の中から手帳を取り出し、パパッとメモを書いて紙を四つに折りたたんだ。それをJに渡し、

「店員さんに渡して」と告げる。

あまり難しい漢字は得意じゃないだろう。メモを渡しておけば確実だ。

すぐにコートを羽織って、彼は出て行った。ちなみに一番近いコンビニは、ホテルのすぐ隣に
ある。

頭に思い浮かんだものを書きだしたが、我ながら知恵が回るものよと内心ほくそ笑んだ。

十五分後、戻って来たJから買い物袋を受け取り中身を確認する。

中には定番のお泊まりセットや歯ブラシなどのほかに、マスクとアイマスク、そして生理用品。

「ありがとう」と受け取った私に、彼は小さく「悪かった」と謝罪した。そんなものを買って来させて！と恥ずかしがるとか怒るのではなく、ちゃんと謝るのであれば、彼はそんなに悪い奴ではないのだろう。

「はじめに女性の体調を気遣うべきだった」

「まあ、うん。気をつけてね」

「薬も買って来た。辛かったら飲むといい」

「ありがとう」

本当、出会ってまもないふたりの会話とは思えないな……お互いに。

先にお風呂を使わせてもらうことにして、洗面所にこもる。ガサゴソと袋を開けると、頼んだ下着は店員さんが気をきかせたのか、サニタリーショーツだった。

「あちゃ〜……いや、正しいチョイスなんだろうけど、参ったな」

実は生理は先週末に終わっている。つまり、今はお肌も体調もよく、こういうたものは不要なのだ。

いくら私好みの手を持っていると言っても、勢いや流れで肉体関係を持つわけにはいかない。そのための保険だったのだが……

「ま、いっか」

出勤前に新しいパンツを買えばいい。この新品のサニタリーショーツはバッグに入れて持って帰るとして、一晩くらい同じパンツでも我慢できる。

豪華なバスタブにお湯を張って、メイクを落として身体を洗う。チャップンと温かいお湯に浸かれ、疲労感が癒やされていくようだ。

ああ、本当。一晩でいろいろとあり過ぎて疲れた……

二十分ほどお湯に浸かり、ホテルのパジャマに着替える。髪を乾かして歯を磨くと、寝る準備は万端だ。

がさごそと再び袋を漁り、取り出したのはマスク。喉の乾燥を防ぐためなどいくらでも言い訳はできるが、一番の理由はスッピンを見られたくないから。

社会人も数年目を迎えれば、メイクの技術は上がる。主に、隠す方向で。

素肌なんて、よっぽどのことがない限り見られたくないわよ。毛穴の開きに小鼻の黒ずみとか、至近距離で見られたら恥ずかしすぎる。

——そしてこの日の夜。

私は自分に求婚する名前も知らない男と、はじめての同衾を迎えた。

「……これは、なにかおかしくないか」

「言ったでしょ。古来から日本では、男女がはじめてひとつの寝具で寝るとき、お互いの顔を見せたいいけないという決まりがあるの。最低でも三日は顔を隠して寝るのよ。ちなみに指一本触れたいけないわ」

「それは、奥ゆかしいにもほどがあるだろう」

ベッドの上にやたらたくさんある枕のうちの二個を、キングサイズのベッドの真ん中に置いて、